

Title	リチャード・バクスターにおける市場経済と経済的抑圧
Author(s)	梅津, 順一
Citation	聖学院大学論叢,18(1) ; 1-21
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=101
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

リチャード・バクスターにおける市場経済と経済的抑圧

とくに雇用労働と借地農をめぐる

梅 津 順 一

Richard Baxter's View of Economic Oppressions

Junichi UMETSU

The paper aims to clarify Richard Baxter's view of the economic oppressions of his day. As a Puritan casuist Baxter dealt with economic problems such as master servant relations and landlord-tenant relations. In contrast to servants who were free to change their masters, tenants faced a more serious situation. Those tenant who failed to keep up with the market economy came to be in a critical situation due to the raising of their rent. Baxter urged landlords to pay attention to the customary right to rent and to reduce it to two thirds. He believed that the rule of the market should be tempered with charity.

Key words; Richard Baxter, Puritan, Market Economy, Economic Oppression, Max Weber

- | | |
|----------------------|------------------|
| 一、はじめに | 五、借地農と「搾出地代」 |
| 二、『キリスト教指針』における経済的抑圧 | 六、借地農の隷属と救済 |
| 三、雇用関係における抑圧 | 七、公共的福祉とキリスト教的利害 |
| 四、プランテーションの奴隷労働 | 八、おわりに |

.....

一、はじめに

17世紀イングランドの著名なピューリタン牧師バクスターの主著『キリスト教指針』は、信徒の日常生活にそくした包括的な決疑論として知られている。本書は信徒の直面するさまざまな問題を取り上げ、良心的な問題解決を指針しているのだが、この著作はマックス・ヴェーバーが『プロテ

スタンティズムの倫理と資本主義の精神』に重要な根拠を与えたものでもあった。⁽¹⁾ ヴェーバーは禁欲的プロテスタンティズムにおける天職義務を中核とする合理的な生活態度を、近代資本主義に適合的なエートス、「資本主義の精神」を準備するものと考えたのである。「救済の確証」のために励まされたプロテスタントの禁欲倫理は、次第に宗教的な緊張を失い「徳への道」と「富への道」の一致を楽観的に説く、ベンジャミン・フランクリンの生活態度へと変化していった。ヴェーバーはフランクリンを「資本主義の精神」の典型的な担い手と考え、バクスターにプロテスタント禁欲倫理の典型的表現を見出したのであった。

ところで、この「プロテスタンティズムの倫理」から「資本主義の精神」へというヴェーバーの図式には、数多くの批判も寄せられ、一大論争史を構成している。とくに、ヴェーバーが典拠とするピューリタニズムには資本主義に対する親和性ではなく、むしろ反資本主義的態度が含まれているという指摘がしばしば寄せられている。⁽²⁾ バクスターに即してそのような批判を提起しているのは、イギリス革命史家ウィリアム・ラモントである。ラモントはピューリタニズム・資本主義論争に言及した著作のなかで、バクスターの社会的理想は「慈愛の共同体」であったとして、次のような論述を引用している。

「真実の慈愛が生き生きと躍動しているところでは、すべての人々が自発的に教会と貧民の必要に応え、自発的に全てのものを共有にしたのです。共有の意味は、第一次的な権利の意味での共有ではなく、利用のために自発的に提供することによる共有です。神と教会、それに兄弟姉妹の必要がそれを求めているときでも、何であれ自分自身だけのものとは誰も考えていません。私たちは慈愛の共同体を作り出すキリスト教的愛からより多くのものを持つのです。その慈愛の共同体は修道士の共同体と利己的な所有権への固執とのあいだの本当の中間にあります。」⁽³⁾

確かに、バクスターはここで「利己的な所有権への固執」ではなく、自発的に相互の必要とりわけ教会と貧民の必要に応える「慈愛の共同体」の実現を提起している。ではそれは、他方で、市場経済の進展に対して積極的な対応を指針しているバクスターの立場とどのような関係にあったのであろうか。別の機会に論じたが、ヴェーバーが目したように、バクスターは天職義務を教えて独立生産者を育て、「平等で公平で正直な」市場倫理を勧告していた。バクスターは、いわば市場経済、近代資本主義に親和的な行動様式を勧めるとともに、他方で、ラモントの引用にあるように「慈愛の共同体」の実現をも求めていた。この両者はどのように整合的に理解できるであろうか。以下では、バクスターが『キリスト教指針』のなかで経済的抑圧を取り上げている部分、それに遺稿として残された晩年の著作『貧しい農民の擁護者』⁽⁴⁾を手がかりに検討することにしたい。経済史的な常識からすれば、中小の独立した商工業者、独立自営農によって担われた初期資本主義は、次第に少数の勝者と多数の敗者を生み出すものと想定される。いわゆる中産的生産者層の両極分解である。バクスターはそうした市場経済の進展と社会的階層分化に対して、どのような見解をもっていたのかを検討したいのである。

二、『キリスト教指針』における経済的抑圧

膨大な分量を持つバクスターの著『キリスト教指針』は、第一部、キリスト教倫理学、第二部、キリスト教家政論、第三部、キリスト教教会論、第四部、キリスト教政治学という四部構成をもっている。これらはそれぞれ、個人の義務、家庭の義務、教会の義務、支配者および隣人に対する義務を取り上げたものだが、経済問題に関する指針としてとくに注目されるのは、第四部の第十八章、第十九章、第二十章である。すなわち、第十九章で「契約一般に関して、とくに売買、貸借、利子に関する良心的諸問題」が取り扱われており、その前後に第十八章「あらゆる窃盗、詐欺、他者を侵害する取得、保持、欲望」が、第二十章「抑圧に関する指針」が配置されている。バクスター自身、市場取引の良心的解決を与えるとともに、それに深く関連する盗みすなわち所有権の侵害と経済的な抑圧を取り上げるのである。

その第二十章第一節「抑圧を妨げるための動機と指針」では、抑圧は「力を用いて権利が抑圧されるとき、抵抗できない、あるいは権利を主張できないような、地位の劣る人々を侵害すること」と定義されている。すなわち、抑圧とは身分が低いあるいは立場の弱い者が、強者の不当な力の行使に屈従させられることだが、かといって、貧しい人々、劣位の人々の苦情すべてが抑圧に相当するというわけではない。貧しいものの期待それ自身が、不当である場合もあるからである。「犯罪を正当に処罰したのに抑圧」と呼ばれる場合もあるし、「多くの貧しい人々は、上位の者からこうむる事をすべて、あたかも富裕なものがしたことだから、侵害であるのは明らかだとして、抑圧と呼んでいる」からである。したがって、抑圧と言いついて立てられることがすべて事実ではないが、しかし抑圧は明らかに「非常にありふれた憎むべき罪」であった。⁽⁵⁾ バクスターは抑圧にもいくつかの種類があるという。

第一に、宗教的な迫害。「1、もっともよくある憎むべきものは、神に従わないものが、神と救いの事柄について無関心ではない人々、宗教的見解について彼らと同意見ではなく、彼らのように罪に対して不遜な態度をとったり、魂に配慮を払う人に対して、悪意をもって侵害し残酷に振舞うことです。」第二は、政治的な抑圧。「2、二番目は、支配者による臣民の抑圧です。不正な法律や残酷な強制執行による場合もありますし、共通善が求める以上に、あるいは人々が負担できる以上に、人々に対して不当な賦課金を求めたり取立てを行うことです。多くの税金や貢納や強制労働を課すことです。」なお、王政復古後バクスターは最終的には信従を拒み、宗教的特権を剥奪され、政治的にも弾圧される危険があったことから、「しかし私は意図的に、こうした為政者の罪について触れることを差し控えます。」とも付記している。⁽⁶⁾

この政治的な抑圧と関連するものに、兵士による抑圧があった。「3、兵士たちはもっとも非人間的な野蛮な抑圧の罪をよく犯しやすいものです。つまり、貧しい田舎で人々を略奪し威張り散らし、

彼らから厳しい労働の果実や、彼らが家族を養うための穀物を奪い、彼らが保持できる全てを取り上げたりします。この種の人々はあまりに野蛮で非人間的なので、私が与えようとする忠告は読むことも関心を払うこともないでしょう。」⁽⁷⁾ こうした宗教的迫害、政治的弾圧、兵士による抑圧は、市民革命期の生々しい経験に由来する。これに対して、バクスターがここで経済的抑圧として注目するのは、経済的弱者の抑圧であり、具体的には、雇主と雇人の関係と地主と借地人との関係が念頭に置かれていた。

「4、雇主 (Master) による雇人 (Servant) の抑圧については、以前十分に述べました。また、雇人が自由によい雇主をもとめて職場を変わることができるわれわれの間では、この抑圧はとくによくあるものとはいえません。むしろ雇人の方が、自分たちは自由だと知っているので、通常仕事を怠ったり、誠実にやらなかったりします (徒弟の場合は違いますが)。」

ただし、富者が貧者を抑圧することはしばしば目撃されることであった。「5、あらゆるところで、富者が貧者に対してあまりに横柄に威張りちらし、自分の意志に従うことを強要し、良い事でも悪いことでも、自分たちのために働くようにすることは、本当によくある抑圧です。したがって、富者にあえて腹を立てる貧者は稀です。...富者が自分たちに損害を与えても、貧者は法律に訴えて救済を求めようとはしません。というのは、富者は友人や富を利用して貧者を消耗させるからです。自分の根拠は決して不当ではないと法律を逆に貧者に向けたり、貧者を滅ぼすまで訴訟を長引かせ、抑圧的な自分の意志に従わせようとしています。」⁽⁸⁾

経済的抑圧の中でもとくに深刻と考えられたのは、次に見るような地主 借地人関係であった。「6、とくに無慈悲な地主 (Landlord) は、よくいる酷い農村の人々の抑圧者です。二三の人々が地域の土地全体を購入するのに十分な資金を得るとすれば、彼らはそのお金で望むことをやる事ができると考えます。借地人 (Tenant) たちに対して厳しい条件を設定しますので、借地人たちは彼らの雇人のようになり、そう、雇人よりも労苦多い生活を余儀なくされます。彼らは年中厳しい労働をしても、地主に地代を支払う十分なものを確保することはできません。窮乏に迫られ、彼らは朝夕、家族で祈ったり、聖書や良書を読んだりする時間をもつことはできません。神聖な事柄を考える余裕がほとんどないのです。...身体はうんざりする労働で疲労困憊になり、心は、地代の支払いや、家族に食べさせさせることを絶えず配慮することで乱され、貧しく抑圧されている人々...そうした困難を抱えた不満をもつ人々が、神に感謝し、喜んで賛美して生活することは、なかなか出来ないのです。この世の肉欲にふける身分の高い人物の多くが、その借地人や雇人を、ただ自分たちのために労働し労苦し、自分たちの意志を実行することを喜びとし、自分たちの愛顧によって生きている者、いわば彼らの野獣であるかのように使用しています。」⁽⁹⁾

では、バクスターはこうした経済的抑圧をどのように捉えて、どのような診断を下し、どのような実際の解決を与えていたであろうか。次に、まず雇用関係から具体的に見ていくことにしよう。

三、雇用関係における抑圧

バクスターの雇用関係に関する指針は、第二部、家庭の義務、第十三章「雇人の雇主への義務」、第十四章、「雇主の雇人への義務」で取り扱われている。家族は夫婦関係、親子関係を基本としているが、そこには雇主 雇人という雇用関係も含まれる場合もあった。農業経営であっても、商工業の経営であっても、住み込みの労働者がいる場合があり、家庭と職場が切り離せない状態にあったからである。もとより、家長である雇主の指揮の下に労働する雇人といっても、必ずしも一様ではなかった。農業経営では、住み込みの雇人の他に、家族持ちの通いの雇人があり、また農繁期にかぎって雇用される日雇い労働者もいた。また、商工業経営の場合には、住み込みの労働者として、十代の前半から七年程度修業する徒弟がおり、徒弟を終えて家族を持ち通ってくる熟練職人もいたし、それに日雇労働者が加わる場合もあった。⁽¹⁰⁾ ここでバクスターは、とくに住み込みの労働者、継続的な雇用関係にある労働者を念頭においている。

バクスターが雇主、雇人それぞれに与える指針から、雇用関係がどのように理解されていたかが窺えるわけだが、バクスターが最初に与える指針はそれぞれが自分の職分を弁えることであった。雇主は雇主としての義務を果たし、雇人は雇人としての義務を果たさなければならないのである。

雇主に対しては、こういわれる。「指針1、キリストにあって、彼らは(雇人)はあなたの兄弟であり、仲間の働き人であることを覚えていなさい。それゆえ、彼らを暴君のようにではなく、優しさと愛によって支配しなさい。神の法と彼らの魂の益に反することは何も命じることの無いようにしなさい。彼らに対して、怒りや人間らしくない憤激をもって接することの無いようにしなさい。厳し過ぎたり、不必要な叱責や懲罰を与えることのないようにしなさい。誤りを指摘するときは、感情を鎮め、よい方向に向くように、賢明さと慎みを持ってしなさい。」⁽¹¹⁾

このように雇主は暴君となることなく仲間として雇人に接し指導するようにといわれるが、雇人に対しては、自己の立場に不平を漏らすことのないようにと勧められる。

「指針1、あなたを雇人の生活へと召した神の摂理に対し、敬意を払いなさい。あなたの労働や低い境遇に不平を吐いてはなりません。あなたはあなたが受けた哀れみを知り、それに感謝しなければなりません。おそらく、あなたは雇主よりも多く労働しているでしょう。しかし、彼らよりも心労は少ないのです。感謝し不満を持たないのであれば、ほとんどの雇人はより平穏な生活を送ることができます。あなたは、地主に対して地代を支払うこと、雇人に対して食糧や賃金を与えること、妻や子どもたちの要求や願望への対処、それにあなたが付き合わなければならない雇用仲間の欠点や行儀の悪さを心配することはありません。少しの身体的な労働はありますが、多くの重荷から解放されていることを、神に感謝しなさい。」⁽¹²⁾

また、バクスターは雇主に対して、雇人には適正な仕事以上を求めてはならず、労働の報酬とし

て適切な賃金を支払うようにと注意を促している。

「指針2、彼らには彼らにとって都合の悪い、彼らに適切な仕事を与えなさい。彼らの健康を損ねたり、救いにとって必要な手段を遠ざけてはなりません。また、楽すぎて怠惰な心を育て、貴重な時間を失わせてはなりません。担うことのできない重荷を馬に運ばせることや、牛を痩せこけるまで働かせることは残酷なことです。...とくに、雇人に健康や生命を損うような労働を課してはなりません。...労働は身体を健康にするものですが、寒さに曝し足まで濡れることは病気や死につながります。あなたの利益のために他人の生命が失われることがあってはなりません。あなた自身が雇人であれば、そうして欲しいように、雇人に接しなさい。過重な労働を課して、彼らに祈る時間を与えないとか、あまりに疲労を与えて、祈りや教育の面で主の日の礼拝に備えられないようにしてはなりません。また、地位の高い人の多くが自分に仕える者を、〔怠惰にし〕その魂や身体を破滅させるように使用していますが、あなたはそのように雇人を怠惰にしておいてはなりません。怠惰はそれ自身小さな罪ではありません。それは多くの罪を育て繁茂させます。」⁽¹³⁾

「指針3、雇人には、健全な食糧や住居と、彼らの仕事の価値にふさわしい、あなたが約束した賃金を与えなさい。快適かどうかは別にして、彼らの食糧や住居は健康なものとしなさい。雇人や日雇いの賃金をごまかすこと（つまり価値以下しか与えないこと）は、ひどい抑圧であり不正なことです。」⁽¹⁴⁾

このように、バクスターは雇人に過重な労働を求めること、労働の価値以下しか賃金を支払わないことを、抑圧と捉えている。雇用関係では適切な労働がなされ、適切な賃金が支払われることが重要なのであり、これに対応して雇人の側は雇主に従い、サボることなく良心的に労働に従事しなければならぬのであった。

「指針3、雇人の全ての労働や義務を遂行する上で、良心的に誠実に行いなさい。なすべき仕事を怠ってはなりませんし、だらけたり、偽ったり、半分の力で رفتりしてもいけません。ある人が市場で相手に、商品の全部を売るといいながら、一部を手元に置き、相手を偽るときには、盗みやごまかしをすることですが、それと同じく、雇人が時間と労働を相手に売るといいながら、その時間と奉仕を偽ることは、同じごまかしです。それゆえ、あなたのものではない時間を怠惰に失ったりすること、なすべき仕事をぞんざいに行うことは、罪でないと考えてはなりません。」⁽¹⁵⁾

「指針5、あなたに信頼して任されたすべてのことを真実に誠実に行いなさい。雇主のものは同意が無い限り、どんなものでも処分してはなりません。...貧しい人を助けたり、仲間を喜ばせたり、隣人に親切をしたい時は、あなた自身のものでしなければならず、他の人のものでしてはなりません。...あなたが盗んだりごまかしたりするものが、ごく僅かな金額でも、その価値は小さくありません。あなたはそのわずかなもので、神の法を破り、その小さな事であなたの魂を危険にさらすのです。...売買を任されている雇人はこのことをよく考えるようにしなさい。もしも隠すことができ、あなたの雇主をごまかせたとしても、それを知る神が明るみに出すと考えなさい。」⁽¹⁶⁾

このように、雇主が雇人に適切な仕事を与え、雇人はその仕事を誠実に果たすこと、それに対して雇主は、労働にふさわしい約束した賃金と、健全な食糧や住居を与えるとすれば、正当な雇用関係であり、抑圧的な関係は生じないわけである。しかし、雇主が不当な労働を要求したり、賃金を不当に押し下げたりしたら抑圧となる。ただし、バクスターは雇用関係については楽観的であった。先にも見たように、「雇人が自由によい雇主をもとめて職場を変わることができるわれわれの間では、この抑圧はとくによくあるものとはいえません。むしろ雇人の方が、自分たちは自由だと知っているので、通常仕事を怠ったり、誠実にやらなかったりします⁽¹⁷⁾」という判断があったからである。ここでも次のように語られている。

「もし、あなたの労働が（湿気とか寒さなどで）あなたの健康を損なうのであれば、あなたはそれを見越し、…回避することができます。しかし、労働そのものをあなたが渋るのであれば、それは肉欲的な不信仰な人間の罪です。労働が過度にわたり、神への義務を行う時間が奪われ、健康に悪影響を受け、魂を損ねることがないようにすることは必要です。」「指針10、家族の食糧の粗末さに不平をいわないこと…もしも、あなたの健康に必要なだけ得られないのであれば、今いる職場を非難することなく、他の職場にできるだけはやく移りなさい。⁽¹⁸⁾」

このように、バクスターは劣悪な労働条件で働いている雇人には、職場を替わるように勧めている。別にいえば、雇人は自由に職場を選ぶことができる、その意味では労働と賃金についても、雇主と雇人のあいだで「自由で公平で平等」な取引が行えると想定されているのである。そうであれば、雇人は雇主の不当な経済的抑圧に忍従することは必要なかったのである。

四、プランテーションの奴隷労働

ところで、バクスターは雇主の義務を論じる中で、「外国のプランテーションで黒人その他の奴隷を所有する」ことについても触れている。これはピューリタンが西インドのイギリス植民地における奴隷労働をどう捉えたかという興味深い問題とも関る。まず、バクスターの奴隷に対する基本的な見解は、奴隷もまた神の理性的な被造物であって、野獣とは区別されるというものであった。したがって奴隷の所有主は、奴隷を神から託されたものとして取り扱い、彼らの魂に配慮しなければならなかった。

「指針1、奴隷に対してあなたの権力がどこまで及ぶのか、神が定めた限界は何かをよく理解なさい。

というのは、1、人と野獣のあいだには十分に違いがあります。彼らはあなたと同じ人種であることを覚えていなさい。すなわち、彼らはあなたと同じく理性的な被造物で、おなじ自然的自由を持って生まれました。もしも、彼らが罪によって奴隷化されたのであるとしても、自然は彼らをあなたと同等の存在にしています。彼らは滅びることのない魂をもち、あなたと同じく救われること

が可能です。…宗教的義務のための時間を与えることが必要です。

2、神は彼らの絶対的な所有者であり、あなたの所有はそこから引き出された限定されたものであることを覚えていなさい。…

3、彼らもあなたも、同様に神の統治と法の支配の下にあることを覚えていなさい。それゆえ、神の法の全てを彼らが守れるようにしなければなりません。あなたは彼らに神が命じた義務を怠るようになること、あるいは神が彼らに禁じた罪を犯すようにと命じる権力はもっていません。⁽¹⁹⁾

「指針2、あなたはキリストの受託者であり、彼らの魂の保護者であり、…彼らへの責任があります。…あなたは愛と権力を行使して、彼らをキリストを知り信じるものとし、神の命令に従順になるようにしなければなりません。…黒人や奴隷に神の言葉を聞かせることを阻止し、キリスト者となるのを妨げる者は、神への反逆です。…そうしない者は、この世の利益を宝とし神とすることになります。」⁽²⁰⁾

また、次に見るようにバクスターは、中南米のスペイン領植民地における過酷な奴隷労働について知っており、それと比較の下で、イギリス植民地の奴隷使用を取り上げ、奴隷を野獣扱いすることのないようにと厳しく戒めていたのである。また、バクスターが、ニューイングランド植民地で奴隷使用はないと考えていることも注目される。

「隣国の状況…イスパニョーラ、ジャマイカ、キューバ、ペルー、メキシコその他の非人間的な残酷さ。何百万を殺害した彼らの残酷さは、人々の身体を殺していないあなたがた以上に酷いものです。しかし、あなたがたも同じようなもので…奴隷から救いの機会を奪っています。…これとは対照的に、ニューイングランドの人々は、土着民から土地を取得する上で、購入以外の方法で取得していないことは、名誉なことです。彼らは誰も奴隷とせず、残酷に取り扱いもせず、哀れみを示し、多大の配慮と費用と労苦とを彼らの救いのために用いています。神聖な主人であるエリオットの生涯は、あなたがたとはいかに相違していることか。彼は長い年月彼らの救いのために労苦し、聖書全体をその他の本と共に彼らの言葉に翻訳しています。ロンドンの善良な人々は彼の仕事を推進するために団体を作っています。」⁽²¹⁾

ここで記されているエリオットとは、バクスターの友人でインディアン伝道に尽力したジョン・エリオット⁽²²⁾のことであるが、ここでバクスターは、そもそも奴隷労働自体が合法的ではないと明確に語っている。すなわち、「質問1、キリスト者が人間を奴隷として購入し、使役することは合法的ですか。」という疑問には、「犯罪に対する正当な刑罰以外は、人間は奴隷化され、自由、利益、安楽を奪われることはない。」と断言するのである。例外的に可能な奴隷化とは、「盗みを返済できないものが、雇人として労働を強制される」とか、「合法的な戦争の敵」すなわち、戦争捕虜を奴隷として取り扱う場合が念頭に置かれていた。また、貧困によって奴隷状態になることはしばしば見られたが、それについてバクスターは、「貧困とか窮乏により、よりひどい状態に陥るのを逃れるために、それよりもましな状態を、金銭の代価として同意する場合があるが…その人の窮乏を利用

してそうしてはならない。」と指摘している。というのは、双方が同意すれば正義として通用するかといえそうではなく、「適切な程度の慈愛と結合していない正義は、キリスト者や人間にはふさわしくない。」からである。²³

ところで、この時代には積極的な営利事業として奴隷狩りも見られたが、それをバクスターは口を極めて非難する。「海賊となり、貧しい黒人とか、生命も自由もある他国の人々を捕まえ、奴隷化し、売ることは、この世界でもっとも悪辣な盗みです。そうしたことをする人間は人類の共通の敵と取り扱われます。また、彼らを購入し、自分たちの利益のために使役するものは、彼らの魂を裏切り、破壊し無視するもので、キリスト者というよりも、身体を持つ悪魔と呼ぶにふさわしいのです。²⁴」バクスターがそうした海賊的行為だけでなく、奴隷売買も禁じていたことは、次のような指針から知られる。

「質問、黒人その他の奴隷を、海賊行為で盗んだ、もしくは彼ら売る権力を持たない相手から、買い取るのはどう考えたらよいでしょうか。

答、1、慈愛心から解放するためにするのでなければ、買い取ることは憎むべき罪です。2、買い取ったのであれば、疑いなく彼らを解放しなければなりません。なぜなら、権利によって、人間は自分自身のものであり、それ故、だれもその人に正当な権利をもってはいません。²⁵」このように、解放する目的以外に奴隷を購入してはならず、購入してしまったのであれば、解放しなければならない。なぜなら、奴隷であっても野獣ではなく人間であり、自然的自由を持つからにはほかならない。この原則は徹底したものであり、奴隷を購入した場合には、経済的不利益をこうむるとしても、転売してはならないし、買戻しを求めてもならないと命じられている。

「質問、しかし、購入したものを再度売り、貨幣を手に入れてはいけませんか。…回答、いけません。なぜなら、あなたが彼を保持し、所有物としたときに、彼に加えられる侵害は、あなたによるものだからです。…あなたが加える悪は、他の人がやったのと同じですが、今はあなたによってなされるのです。それはあなたの罪です。

質問、しかし、私は彼を、私が買った相手に返してはいけませんか。

回答、いけません。というのは、それは侵害を続けるために彼を他の人に渡すことだからです。ピラトのように、私はこの正しい人の血には責任が無いというのは、あなたの無実を示すことではありません。神の法はあなたに、愛と愛の業をもとめます。それ故、彼を自由にするように最大のことをしなければなりません。²⁶」

このようにバクスターは、植民地のプランテーションにおける奴隷労働については、犯罪の刑罰としての奴隷、戦争捕虜としての奴隷以外には正当な理由を認めず、まして、海賊的な奴隷狩りについて厳しく非難し、そのように得られた奴隷を売買してはならず、即刻解放することを求めたのである。また、正当な理由にもとずく奴隷の場合であっても、人間として取り扱うこと、すなわち奴隷の宗教的関心を呼びおこさせ、同じ人間としてその魂に配慮することを求めた。²⁷

五、借地農と「搾出地代」

ところで、バクスターがイギリス国内でもっとも深刻な経済的抑圧と考えるのは、地主 借地農関係であった。当時イギリスの農業では一般に、貴族およびジェントリー層が土地所有者層であり、直接農耕に携わる独立自営農民は、上層民はヨーマンとよばれ、その下にハズバンドマンと呼ばれる農民がいた。ヨーマンはおおむね50エーカー以上の土地を保有していたのに対し、ハズバンドマンはそれ以下であったが、他人のための賃労働からは免れている点で、ごく僅かな土地しか保有しない小屋住農とは異なっていた。土地保有の形態からいえば、ヨーマンは名目的な地代を支払うが、事実上の所有権を持つ自由保有が多かったのに対し、ハズバンドマンの多くは膳本保有であり、この場合には慣習的な地代によって長期に保有しており、契約更新時には相当額の一時金を支払う必要があった。⁽²⁸⁾ バクスターが借地農の抑圧として問題にしているのは、このハズバンドマンに対する地代の引き上げ、いわゆる「搾出地代」の一般化であった。

『キリスト教指針』第四部、第20章の抑圧に関する指針では、とくに節を分けて具体的に借地農の抑圧問題が取り上げられている。ここでバクスターは、地代の引き上げについて次のように問題を設定している。

「質問2、地主はその土地から、その価値どおりに、地代を取ってはいけませんか。
答1、安い地代で保有することに対し、衡平法上の権利を主張できない土地もありますし、前に述べたように、慣習、長期保有その他の理由で、できる場合もあります。2、借地人が、あなたが哀れみを示さなければならない状態にある場合もありますし、交換的正義を考えるだけでよい場合もあります。私の答は、1、古くからの借地人で、慣習その他の理由で衡平法上の権利を主張できるのであれば、地代を完全な価値まで引き上げてはなりません。2、あなたが相手に、正義とともに慈愛を示さなければならないのであれば、完全な価値を取ってはいけません。3、イングランドの通常の場合は、地主は貴族がジェントリーで、借地人は、保有する土地から厳しい労働で得るもの以外何も持たない貧しい人々です。こうした場合、完全な価値をある程度減額することが、正義と言ってもよいほどの必要な慈愛です。私が完全な価値として意味しているのは、人々が市場でものを売買するように、厳格な正義のみを予期する見知らぬ人に対して設定できる水準の地代です。」⁽²⁹⁾

ここで注目されるのは、バクスターが地代の引き上げを「価値どおり」と表現していることであり、他方、農民は長期保有や慣習によって、従来の地代に「衡平法上の権利」をもつ場合があるといわれていることである。すなわち、ここでは膳本保有の農民の地代引き上げが問題であり、地主は「価値どおり」の引き上げを求めているわけである。その「価値どおり」の「完全な価値」とは、「人々が市場でものを売買するように、厳格な正義のみを予期する見知らぬ人に対して設定できるだけの地代」に他ならない。すなわち、問題の土地に対して、引き上げた地代を積極的に引き受け

ようとする新しい借地人が現れることが想定されている。次のような設問はその間の事情を示唆している。

「質問3、地主は完全な価値までではなくとも、地代を引き上げてよいでしょうか。

答、正当な理由があればできます。正当な理由がある場合とは、1、土地が以前はかなり過少評価されていた場合、2、土地がそれなりに改良されたとき、3、多量の貨幣によって金額は多くなっても、事実上は以前と価値が変わらないとき。4、人口の増加その他で、土地が以前よりも高価になったとき。しかし、地代引き上げには次のことが前提となります。1、契約も、2、慣習も、3、奉仕や功績も、借地人によりよい地代に対する衡平法的権利を与えていないこと。」⁽³⁰⁾

すなわち、ここでは土地が過少評価されていた、あるいはインフレによって事実上は引き上げにならない場合に加えて、土地が改良される、あるいは人口増加などの理由で農産物への需要が増大し、積極的な農業経営によって地代引き上げに応じることができる場合が示唆されている。その間の事情は、バクスターの遺稿『貧しい農民の擁護者』からより詳しく知ることが出来る。バクスターはここで当時農民から搾り取るという意味で、「搾出地代」と呼ばれた地代引き上げに対して農民を擁護しているのだが、他方で地代引き上げに応じることができる借地農もいたことが記されている。

「10、私が擁護を求めるのは、すべての農民ではなく、搾り取られている貧しい農民のことである。... 1、私は地代を支払う必要のない自由保有農のことは言っていない。2、農場のほかに、自己の保有地を持つ（僅かな数だが）豊かな自由保有農について語っていない。ロンドン近郊には、年々、200ポンド、300ポンド、400ポンド、そう500ポンドの収入を上げる自己の土地をもつ農民がいる。彼らはロンドンから離れた土地では、上層のジェントルマンとして通用するほどである。」⁽³¹⁾

「私はまた、ミドルセクスやその周辺、とくにロンドン近郊の農民について語っているのではない。というのは、彼らは土地に二倍の地代を支払っているが、土地を改良し、地代を支払える三倍もの機会を持っている。...ロンドンから人糞、家畜糞を集めて肥料を作り...肥料を販売する...。また、ロンドンに農民が持ち込むすべてのものを吸収する市場であり...近郊の農民は、庭畑の産物、豆類、かぶで、地方の貧しい農民の十倍もの収益を得ている。30ないし40マイル離れた所に、豊かな牧草地をもつ農民は、子羊や肥育した羊、牛、豚、ガチョウなどを、ロンドン市場で売ることが出来る。100マイル離れた地方でも、ロンドン市場に一群の豚や牛を運送するのにかかなり費用がかかって割が合うと考えている。アイルランドから海を渡り陸送する場合でもそうだ。グロスタシャー、サフォーク、ウォリックシャーなどでも、荷物をこの全てを吸収する市場に送る。ヨーク、ノリッジ、ブリストルなど、ロンドン以外の大都市周辺に住む人々も、ある程度同じ利益を得ていると考えられる。」⁽³²⁾

「私はまた、年々5ポンド、10ポンドの小さな借地をもち、手工業で生活を支える借地人についても言っていない。織布工、肉屋、仕立て屋、指物師、大工などは、土地しか持たないものが支払う以上に、地代を地主に支払うことができる。」⁽³³⁾

このように、バクスターは地代引き上げに苦しむ農民とは別に、ロンドン近郊の自由保有農、ロンドン市場に向けて土地を改良した経営的農民、あるいは織布工その他商工業との兼業農家もいたことを知っていた。バクスターが価値どおりの地代引き上げというとき、そうした農民が相手であればなんら躊躇する必要はなかった。むしろ、高い地代を支払っても、経営面積を拡大したい農民もいたのである。その場合、地代引き上げは市場取引として、交換的な正義の原則として積極的に推進することが可能であった。バクスターは一面では、価値どおりの地代、競争的な市場行動の結果としての地代を評価しており、その意味では初期資本主義を積極的に推進しているといえるのである。次のような指針は、そのことを別の面から明確に裏付けるものといえよう。

「質問10、一人の借地人がさまざまな借地をもってもよいでしょうか。

答、他の人の害にならず、人口減少とか他の人の生活の妨げにならないのであればできます。他方、必要以上に独り占めする場合があるが、そのときは非合法です。...

質問11、一人の人間が多くの営業や職業をもってもよいでしょうか。

答、富裕になるうという貪欲から、貧しい隣人がその同じ職業で自立して生きることを不可能にし、利益を独り占めしようとするときはいけません。相互に関連の無い職業の場合もいけません。他を無視することになり職業を適切に管理できない場合もいけません。そうでなければ、二つの職業をもつことは合法的です。」⁽³⁴⁾

このように借地農が積極的に借地を拡大すること、また、商工業者が事業を拡大し、関連する営業を展開することを、バクスターは勧めているのである。

六、借地農の隷属化と救済

以上見たように、バクスターの経済指針を、市場経済を推進しているか、あるいは「慈愛の共同体」擁護をしているのか、どちらか一方に位置づけるのは間違いであり、その両面があったことを忘れてはならない。バクスターは地主 借地農関係に市場関係が入り込み、地代引き上げが行われることを積極的に評価する一方、他方では、その結果として農民層の窮乏化が進むことに心を痛めていたのである。『貧しい農民の擁護者』はその後者を主題とするものであった。ただし、そこでも市場経済の原則が否定されているわけではない。

先に見たように、独立自営農の下層に属するハズバンドマンは、土地を贖本保有の形態で保有しており、「古い習慣では、土地は何代にも渡って、少なくとも長期間賃貸し、最初の負担金と、その後の年々低額の地代を受け取るものであった。だから、結婚時に分与財産を受け、土地の賃貸を受けたものは、その後は安楽に生活し、何ほどこか子どものために残すことができた。」それが、今日では地主によって定期借地に転換させられ、地代引き上げが求められているというのである。「今日ではほとんどの州で、この慣習は年々の搾出地代へと変化した。すなわち、長年の借地であっ

ても、毎年借地の価値に応じて地代を支払わなければならず、その金額は誰もが支払う水準である。⁽³⁵⁾

農業史家ボウデンの研究によれば、17世紀初頭で30エーカーを耕作するハズバンドマンは、通常の年で15ポンドほどの純農業利益が得られたが、おそらく11ポンドほどは家族の生活費に必要なだったと見ている。⁽³⁶⁾「10ポンドや20ポンドの地代のは、農業資材、肥料のために支払い、自分自身と妻それに子どもたちに衣食を与え、彼らの労働に応えるために、どうするであろうか。…こうした人々の労働は、多大で、繰り返し際限なく行われる。彼らの身体はほとんどいつも疲れ果て、彼らの精神もいつも心労で問題を抱えている。」⁽³⁷⁾

ただし、バクスターは借地農の食事内容についてはそれほど問題ではないという。「彼らの粗食には同情しない。…彼らの労働と健康のお陰で、黒パン、牛乳、バター、チーズ、キャベツ、カブ、パースニップ、にんじん、たまねぎ、ジャガイモ、乳清、バターミルク、豆パイ、アップルパイ、プディング、パンケーキ、オートミール、フラメリー、ファメティ、乾パンなど、それに飲料は、彼らの食欲を充実した味で満たし、身体に活力と長命を与える。…貧しい人々の最悪の場合とは、終始変わらず、風雨にさらされ、寒暖にかかわらず、自然の必要を満たすことが出来ないことである。」⁽³⁸⁾

バクスターが貧しい農民の窮状として重視するのは、彼らの精神的状態であった。「彼らが通常、知識と敬虔な天的な生活のための援助、他の人が享受している、死のための慰めの準備と展望を持っていない。…彼らは通常大変貧しいので、聖書の一章を読む時間も、家族で祈る時間も持つことができない。彼らは労働から疲れて帰ってきて、読んだり祈ったりする時間がなく、眠りに就くことになる。彼らの雇人は早朝から厳しい労働で疲れて、聞くことに集中できない。…労働で疲れた身体は、旅人の疲れた馬、音楽家の狂った楽器のようなものである。…労苦と貧困で育った多数のものは、読むこともできず、子どもに読むことを教えることもできない。」「また、読むことの出来る人々も、非常に貧しく聖書や小さな本を買うお金が無い。多く読むことは、知識にとって多大の利益となるが、それなしでは、貧しい人々は教会で聞いても多くの益を得ることはできない。牧師たちが公共の場で朗読したり説教したりしても、知識の無い人にはあまり成功しない。牧師は彼らにどうすれば、教理問答を理解させ学ばせることができるであろうか。」

この借地農の窮状と比べれば、借地農の雇人の方がむしろ楽な状態にあるとさえいわれる。「彼らの雇人の場合は、結婚をせずそのままいれば、雇主である貧しい借地人よりもずっと楽である。というのは、彼らは自分の仕事と報酬とを知っており、地代の支払い、市況への対応に煩わされず、穀物や家畜の損失、羊の病気、不順な天候を心配することなく、妻子を養うことや、日雇いや常雇いの賃金を心配することもない。」⁽³⁹⁾

それに、「地主の家事使用人の状態は、ジェントルマンと日雇いの関係のように、貧しい借地人よりはるかによい。彼らは食事に完全に満足し、比較的怠惰に生活している。彼らは貧しい借地人が

一週に一度、一片のベーコンを食べて喜ぶのに、主人の食卓から来る多彩な肉類や魚を食べる。…貧しい借地人は、豚や鶏が子豚や雛鳥を育てても、食べることはできずに、地代のために売らなければならない。彼らは鶏が産んだ卵も、庭のりんごやなしも食べられず、お金を手に入れなければならない。彼らのバターやチーズのよいものは、売らなければならない、自分たちと子ども雇人が食べるは、スキムミルクやチーズ、乳清や凝乳である。」⁽⁴⁰⁾

また、職人たちの生活も、借地農よりはかなりましであった。「よい営業をしている手工業労働者はずっと楽である。指物師や轆轤師は、乾燥した家屋で働き、その労働はほどよい気持ちの良いもので、代価と報酬を知っている。織布工、製靴工、仕立工は、身体を濡らしたり疲れさせたりしないで労働でき、労働に支障なく魂の事柄について考え話すことができる。私は織機で織りながら、説教のノートや書物をまえに置き、働きながら相互啓発のために読んだり共に語り合ったりすることができる多くの人を知っている。しかし、貧しい農民はそうはできない。鍛冶屋の労働は厳しいが、乾燥した家屋でしかも一時的である。脱穀や刈入れと比べればわずかなもので、絶えず全力を傾けなければならない草刈と比べればなんでもない。貧しい運び屋は労苦が多く、どんな天候でもどんな道路でも進んでいくが、彼は自分の仕事と報酬とを知り、農民の多くが経験する損失や苦勞に煩わされることはない。」⁽⁴¹⁾

「同じことが鉄で働くほかの人々についていえる。ダドリー、ストアブリッジ、…などでは、釘工、拍車づくり、鎌鍛冶などがいる。彼らは貧しく生活しているが、農民のようにではない。彼らは自分の労働と報酬とを知っている。…海の漁師についても同じことが言える。労働は許容できるものであり、時間と制限とを知り、彼らの関心は、魚を取り売ることだけである。」⁽⁴²⁾

「こうしたことを考慮すると、われわれすべては、この国の全て、国王も人民も、富裕なものも貧しいものも、その生存を農民に負っているのだが、農民ほど過酷に使用されているのはいないことが分かる。…彼らの中には、商工業者、都市の住民、貧しい手工業職人に見られるよりも、はるかに宗教に関する無知がひろがっている。だが、通常彼らは、富裕な市民や貴族の満腹した怠惰な雇人のように、大食、密通、姦淫、それに怠惰や情性の罪は犯さないし、大酒飲みでもない。しかし、貿易商人、絹織物商、呉服商、そのほか都市の商工業者のあいだで、それに織布工、仕立工などの労働者、それに貧しい釘工といった人々の間では、貧しい隷属化した農民の場合よりも、通常はより多くの知識と敬虔が見られる。」⁽⁴³⁾

このように日ごと地代の支払いの重圧で心労し、余裕が無く宗教的関心事に心を向けることができない借地農には、精神的な隷属化も進行しているとバクスターは見ている。「農民が地主に対するように、奴隷的に依存したものはいない。(例外として、家事使用人とか野心を持った官職志願者がいるが。)農民たちは、地主が追いたてたり、地代を引き上げたりしないように、地主の不興を買うことはしない。私は大地主が、国王以上に農民に支配権をもっていると確信している。もし、地主が悪意のあるもので、敬虔や慎み深さ、平安の敵対者であれば、隷属した借地人は、公共的に

重要な事柄について、彼の言いなりになり、彼に仕えなければならない。昔は今よりも酷かった。伯爵、男爵、主教らは誰でも軍隊を徴募しようとするときには、配下にあるものは従わなければならない。スコットランドやアイルランドでは酷く...こうした事は、農民の奴隷化に由来するのである。⁽⁴⁴⁾

バクスターは借地農の救済策として、『キリスト教指針』で次のように地代の引き下げを提起している。

「質問4、地主は抑圧者すなわち借地人に無慈悲にならないように、完全な地代からどれほど減額しなければなりませんか。

答、一定の比率を決定することはできません。借地人の能力、業績、時期、場所その他の点で、大きな相違があります。借地人が豊かで、なんら減額する義務がない場合があります。...日照りの場合...貨幣不足の地方の場合など...しかし、通常はイングランドの普通の借地人は、完全な価値から減額され、安楽に生活でき、家族で神を礼拝する自由を持ち、澁刺とした気分で労働に従事し、救いの事柄を心に掛け、自由人というよりも奴隷のように、...労苦し、心配し、欠乏に悩まされることのないようにしなければなりません。⁽⁴⁵⁾

『貧しい農民の擁護者』では、同様の趣旨が次のように語られている。

「私の要請を要約すれば次の通りです。あなたがたが、少数の特定の問題よりも国民の公共福祉を重視し、あなたがたのこの世的な利害と肉的な喜びよりは、キリスト教の利害を重視すること。また、そうした点を考慮し、貧しい借地人には、彼らが労働と質素な生活によって安楽に生きることができるように、地代を設定し、地代の支払いと過重な労働に追い立てられて、神の言葉に疎遠となり、家族の宗教を持つことができなくなり、祈りを忘れ、祈るべきときに寝てしまうことのないように、良書がなかったり、あっても読む時間がなく、教会で聞いたことを考える時間がなくなることがないようにしなさい。貧困によって彼らが子どもたちを自分たちと同じ様に教育することができなくならないようにしなさい。⁽⁴⁶⁾

「そのためには、そうした貧しい借地人にたいし、あなたがたが三分の一ほど搾出地代を減額するとすれば、この国のよい模範となると私は考えます。...50年ほどまえは、ほとんどの借地人は旧来の地代のままでしたが、年々搾出地代を設定する地主が増えてきました...別の人がその土地を買い地代を引き上げ、40ポンドの土地を50ポンドか60ポンドに、30ポンドの土地を40ポンドに、2ポンドないし3ポンドを4ポンドにしているとすれば、私が緩和を要請するのは正当ではないのでしょうか。貧しい人々が...支払いできる以上に約束し、心配と労苦で、やりくりするがついには夜逃げしてしまうことがあります。⁽⁴⁷⁾

このようにバクスターは、搾出地代が農民の生活を圧迫し、人間としてふさわしい生き方、敬虔な生活を営むことを不可能にすることを見こした上で、三分の一ほどの減額を地主に要請するのである。この場合、バクスターは借地農に減額を求める権利があるとは述べていない。あくまでも、

地主の自発的な配慮を求めるのであり、厳格な正義というよりも、地主の慈愛心が期待されているのである。

七、公共的福祉とキリスト教的利害

ところで、先の引用が示唆するように、バクスターが地代の減額を求める根拠として、「公共的福祉」と「キリスト教的利害」という二つの原則を提起していることが注目される。この場合、「公共的福祉」の意味を知る手がかりを与えるのは、『貧しい農民の擁護者』第二章における、農民の貧窮化がもたらす公共的重要性の指摘である。そこでは第一に、農民は「1、国の少数者ではなく大部分の人々の問題」であり、また「2、国に不可欠の人々の問題」であるといわれる。それに「3、農民の窮乏化は、他の残りの人々の窮乏化であり、農民のために働く職人は、支払いを受けられない。」とも指摘される。また、「大商人やロンドンのほとんどの商工業者は、地方がその商品を引き受けられないと窮乏化する。農民が必需品を購入し、キッチンとした生活ができれば、都市が農民の市場になるように、農民は都市の商工業者の安定した市場となる。」⁽⁴⁸⁾すなわち、農民の窮乏化は国内市場の狭隘化に繋がるというのである。

さらに、「4、農民の困窮は、モスクワ人、ポーランド人、それにフランス人のように、国民の精神を悪化させる。」とも指摘される。すなわち、貧窮した農民層は、野蛮、無神論、悪意の温床となるのであり、また「5、農村の人々の不名誉は、国王と貴族の不名誉。」でもあった。加えて、「6、国民の安全が脅かされる」とも指摘される。すなわち、「よい政体をもつ王国の民兵は、自分自身守るべきものをもつ、利害関心を意識した人々から構成される。」もしも、民兵の主力を構成する農民層が零落するとすれば、彼らの利害が国の利害とは乖離し、国の軍事的な支柱が揺るがされることを意味したのである。

このように農民層は国家にとって重要な多数の構成員であり、食糧という重要物資の提供者であり、工業製品の購入者であり、しかも軍事的な担い手であった。したがって、健全な農民層の維持こそが公共的な重要関心事であり、公共的福祉に深く関るものであると考えられているのである。しかも、健全な農民層は「宗教とキリストの王国の公共的関心事」でもあった。「貧困は人々から知的な教育と知識の手段を奪うことにより、無知を引き起こす。無知はあらゆる誤りと邪悪の土壌」となるからである。貧しい人々が、「貧しさから読むことができず、子どもに読書を教えることができない」「聖書を知らない」「聖書やふさわしいものを買うお金が無い」「あっても読む時間が無い」「教理問答を教えられない」「瞑想の時間が無い」「説教が理解できない」のであれば、プロテスタント宗教の危機ともなるわけである。⁽⁴⁹⁾

したがって、そうした貧しい農民の窮状を放置すること、農民の窮状を加速させることが、イングランドの「公共的福祉」とプロテスタント宗教を掘り崩すものであった。無論、市場関係に基づ

く正当な地代引き上げに応じられない農民の側にも問題がないわけではない。しかし、地主の側、抑圧者の側にはより大きな問題があり、より大きな責任があったのである。

貴族、ジェントリーを主力とする地主たちは、「1、自分の出生と富を過大評価し、あたかも自分を上位の人間であるかのように考え」、高慢におちいり、「貧しいものを兄弟とも隣人とも考えない」。彼らの「2、金銭愛があらゆる邪悪の根源」であり、それによって「こころを鈍くされ」ている。⁵⁰ それに、「抑圧の大きな原因は、官能、肉的な欲望」であったから、バクスターは貧しい農民に配慮して、地主に次のように勧めている。「私は贅沢品、浪費、肉的な欲望へのあなたがたの不必要で罪的な欲望を削減することをお願いしたい。…あなたがたは、少ない料理、少ない種類、少ない費用、少ない好奇心、それに顕示欲、付き添い、虚栄を慎むことで、健康に慎み深く生きられるのではないのか。」「節制、節欲、簡素で簡単で僅かな食事が完全に消化」され、「血液の純粹さ、滋養ある体液、身体の健康、心の澆刺さ」が保たれるというのである。⁵¹ すなわち、貧しい農民への配慮は、地主自身の心身の健全化を意味すると示唆されるわけである。

また、地主の地代引き上げ要求には「所有権に対する無神論的な誤解」があるとも、バクスターは指摘している。彼らは所有権は自分自身のもので、やりたいように自分を満足させることができると考える。しかし、絶対的な所有権は神自身のものである。「すべてを造りすべてを維持している神のみが、すべてのもの絶対的な所有者である。だれも、信託された雇人、管理人、父の意志に従う子どもとしての所有権以上のものはもたない。」さらに、バクスターは、地主によく見られる「最後の自己欺瞞」として「子どもに富を残そうとする」動機を指摘している。⁵² 子どもたちのために財産分与金を準備すること、あるいは遺産を残すことは、しばしば正当な動機と考えられているが、バクスターによればそれはむしろ子どもの魂に有害となる場合が少なくなかったのである。

ともあれ、地主が借地農の窮状にお構いなしに地代引き上げを図ること自体が、地主の魂の危機であり、プロテスタント宗教の危機でもあった。したがって、バクスターは地主に次のような指針を与えている。

「三、また、ジェントルマンが貧しい借地人に疎遠とならないように…時々彼らの家に行き、どんな状態か、どう生きているかを知ること。私が子どもころ、貧しい人が近隣の貴族（ナイト）を賞賛しているのを聞いたことがある。…彼は貧しい人のところに来て親しく話をし、食器や食器棚を見て、どう暮らしているか知っていた…四、また訪問してこう尋ねること。家族で祈っていますか。とくに主日に神の言葉と良い本とを読んでいますか。子どもたちは読み方を学んでいますか。教理問答と祈ることを教えていますか。」「五、聖書や良書がない家があれば、買って与えること。」「六、子どもたちが学校で読み方を学んでいるかどうか尋ねること」、また「もしも近くに教える人がいなければ、貧しい人を雇って、読み方の学校を建てること」を勧めたのである。⁵³

富裕なものが貧しいもののために、読み書きの学校を設立するなど慈善事業を行うことが、バクスターにとっては理想的な姿であった。事実「ロンドンにぼろやガラスのピンを売って生活してい

る人がいるが、彼はたくさんの貧しい人々に仕事を見つけてあげるとともに、30人ほどの貧しい子どもたちの教育のためにお金を支払った...彼は神がこのことを受け入れて下さったといった。というのは、彼は与えれば与えるほど、繁栄した⁵⁴⁾からである。またこうもいわれる。

「私の亡くなった友人のトマス・フォーリイは、私の最初の後援者、リチャード・フォーリイの三番目の息子だが、彼は父から受けた500ポンドの資金で事業を始めた。貧しい人々に常に寛大で...子どもたちに読み書きを教え、職業訓練する施設を設立し、徒弟にやるために、一年に500ポンドの維持費を設定している。神は彼を祝福し、その三人の子どもはすべて議員である」というわけである。また、「七、教区牧師が、富裕な地主が貧しい借地人の問題を知り、同情を持つように」指導すること、あるいは「八、法律家、医師が、貧しい人々に料金を減額すること」なども重要な社会的配慮であった。そのためには、「十、富裕なものは、富裕なものへの勧めを聖書でよく読むこと」も大切であった。⁵⁵⁾ こうした地主や富裕なものの行為を通して「慈愛の共同体」の構想が実現すると考えられたのである。

八、おわりに

ここでもう一度、ラモントがヴェーパーへの疑問として提出した、バクスターの「慈愛の共同体」に関する記述を挙げてみよう。

「真実の慈愛が生き生きと躍動しているところでは、すべての人々が自発的に教会と貧民の必要に応え、自発的に全てのものを共有にしたのです。共有の意味は、第一次的な権利の意味での共有ではなく、利用のために自発的に提供することによる共有です。神と教会、それに兄弟姉妹の必要がそれを求めているときでも、何であれ自分自身だけのものとは誰も考えていません。私たちは慈愛の共同体を作り出すキリスト教的愛からより多くのものを持つのです。その慈愛の共同体は修道士の共同体と利己的な所有権への固執とのあいだの本当の中間にあります。」⁵⁶⁾

バクスターはここで「慈愛の共同体」を、すべてを共有する「修道士の共同体」と、「利己的な所有権への固執」の中間に位置づけていることは注目される。バクスターの「慈愛の共同体」は、私的所有を原則として承認しており、私的所有を前提として、独立した商工業者も、独立自営農も、召命として職業に従事し、「自由で公正で平等な」市場取引を行っていた。ただし、その私的所有は絶対的なものではなく、絶対的な所有はあくまでも神のものであった。したがって、市場経済の結果として、農民層が窮乏化するとすれば、彼らに手を差し伸べる必要であった。市場経済の結果として、貧しい人々が心労で憔悴し、余裕を失い無知に陥り、神の言葉に接することができず、敬虔な生活を送ることができなくなることが心配されたのである。

こうしたバクスターの経済的抑圧に対する態度は、ラモントの解釈に反して、反資本主義的なものということとはできない。バクスターは共有を貧者の第一次的な権利とは考えていないし、神に託

された私的所有権を前提としているからである。また、雇人の場合に見たように、雇人の側に雇主を変更する自由があり、それによってよりよい待遇を得られるとバクスターは想定しているから、自由な市場自体が経済的抑圧から救い出す力をもっていることを承認していた。また、「搾出地代」自体も、一面では「価値どおり」の地代であると考えており、条件によっては正当な地代引き上げとも見られていた。ただし、いかに正当な地代引き上げであったとしても、結果において、多数の借地農の没落を招き、彼らを心労と無知に沈めることになるのであれば、「公共の福祉」とプロテスタント宗教とを危うくすると指摘されているのである。

バクスターの勤める禁欲倫理は、私的所有と職業思想と自由な市場取引を推進することにより、確かに近代資本主義に適合的な行動様式を準備するものであった。ただし、それらはあくまでも宗教的な理想に根拠を置くものであり、所有権は神から託されたものとして、職業は召命として、自由な市場取引は双方に利益となる正義の原則にかななかったものと想定されていたからである。その自由な市場取引が結果として経済的抑圧を生む場合には、慈愛の原則を加えなければならなかった。自発的な愛の行為によって、「公共の福祉」とプロテスタント宗教を維持することが求められたのである。ただし、『貧しい農民の擁護者』の基調には、豊かな地主に対するバクスターの失望を読み取ることができる。もしも、豊かな側から自発的な慈愛の行為が期待できないとすれば、貧しい農民は憔悴し無知な群集となり下がり、プロテスタント宗教を掘り崩してしまうことはないのか。アングロ・アメリカの資本主義経済のその後の歩みは、形を変えながら、このバクスターの懸念に絶えず直面し続けているように思われる。

注

- (1) リチャード・バクスターについては、簡単な紹介として梅津順一『ピューリタン牧師バクスター』（教文館、2005年）を参照。この本の巻末にはバクスター関連の参考文献も記載されている。なお、本稿で用いる『キリスト教指針』のテキストは、次のものである。Richard Baxter, *A Christian Directory*, in *The Practical Works of Richard Baxter*, Vol.1 (London, 1848), reprint edition, (Soli Deo Gloria Publications, 1996). 以下では CD と略。
 ヴェーバーのバクスター論については関連する文献も少なくないが、ここでは次のものだけを挙げておく。ヴェーバー、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店、1988年）。梅津順一『近代経済人の宗教的根源 ヴェーバー・バクスター・スミス』（みすず書房、1989年）。今関恒夫『ピューリタニズムと近代市民社会 リチャード・バクスター研究』（みすず書房、1988年）。
- (2) ヴェーバー・テーゼに関する論争史については、前掲拙書第一章で詳しく言及したがその後のピューリタニズムを手がかりとした論争へ言及として、次のもの重要である。Michael H. Lessnoff, *The Spirit of Capitalism and the Protestant Ethic: An Enquiry into the Weber Thesis* (London, 1993), H. Lehmann and G. Roth eds., *Weber's Protestant Ethic: Origins, Evidence, Contexts* (New York, 1993). Jere Cohen, *Protestantism and Capitalism: The Mechanisms of Influence* (New York, 2002). 椎名重明『プロテスタンティズムと資本主義』東大出版会、1996年。なお、近年の研究については、梅津順一「ウェーバー・テーゼとピューリタニズム」、深井智朗・フリードリッヒ・グラーフ編『ウェーバー・トレルチ・イエリネック』聖学院大学出版会、2001年。
- (3) William Lamont, *Puritanism and Historical Controversy* (London, 1996), p.119.

- (4) Richard Baxter, Edited by Frederick J. Powicke *The Reverend Richard Baxter's Last Treatise: The Poor Husbandman's Advocate to Rich Racking Landlords*, in *The Bulletin of the John Rylands Library*, Vol.10, No.1, 1926. 以下では、HA と略す。なお、この文書を分析したものととして、大塚久雄「農民層分解に関する基礎的考察」、『大塚久雄著作集』第五巻、岩波書店、1969年所収。
- (5) CD, p.846.
- (6) CD, p.846.
- (7) CD, p.846.
- (8) CD, p.846.
- (9) CD, pp.846, 847.
- (10) CD 農業および商工業の労働者については、Ann Kussmaul, *Servants in Husbandry in Early Modern England* (Cambridge, 1981) Marie Rowlands, *Masters and Men in the West Midland Metalware Trades before Industrial Revolution* (Manchester, 1975). Peter Earl, *The Making of the English Middle Class: Business, Society and Family Life in London 1660-1730* (Berkeley and Los Angeles, 1989).
- (11) CD, p.460.
- (12) CD, p.458.
- (13) CD, p.460.
- (14) CD, p.460.
- (15) CD, p.458.
- (16) CD, p.459.
- (17) CD, p.846.
- (18) CD, pp.459, 460.
- (19) CD, p.461.
- (20) CD, p.461.
- (21) CD, p.461, 462.
- (22) ジョン・エリオット (1604-90) は、トマス・フッカーの影響の下でピューリタンとなり、1631年にアメリカに渡りインディアン伝道に従事した。彼はアルゴンキアン族の言語を学び、説教し、多くの改宗者を得た。エリオットは聖書を翻訳したほか、文法書も表わし、バクスターの *A Call to the Unconverted* (1658) の翻訳もしたといわれる。
- (23) CD, p.462.
- (24) CD, p.462.
- (25) CD, p.463.
- (26) CD, p.463.
- (27) なお、バクスターは通常の労働と契約による自由な奴隷、それに刑罰による奴隷をつぎのように区別している。「1、...雇人や自由な奴隷は、彼らが自分自身を売るまでは双方ともに自由人である。犯罪人は生命と自由を失うまでは自由人である。しかし、その後は違いがある。1、自由な雇人は彼自身の契約がそうする以上に、私の雇人ではない。そこには次のことを含むと考えられる。1) 契約の意味に従って、労働の種類と程度。2)、契約に表現された限定された期間。一年もしくは三年、あるいは七年。
- 2、単なる契約による奴隷とは、1) 労働の種類と程度について、絶対的に他者の意志に売ったもの。しかし、キリスト者のあいだでは、神と自然の限定があると想定されている。2)、そうした労働のために生涯自分自身を売り渡しているもの。
- 3、正当な刑罰による奴隷は、為政者が判断する隷属状態に入る。...労働の種類、生涯、他の人の場合には合法的とは考えられない隷属状態。」
- なお、そうした奴隷の取り扱い方の相違についても言及している。
- 「1、貧困が原因の契約ないし同意による貧窮奴隷の制限状況はつぎのようなもの。1) そうした人間の魂は配慮され、保持されること... 2) 神に反するどんな罪も強要されない... 3、日々の糧と呼ばれる

ような、愛と感謝を持って神に健やかに仕える上で必要な、人生の楽しみは否定されないこと。...

2、ほとんどの犯罪奴隷は、罪を犯すことを強要されず、彼の救済に必要な助力を否定されない。しかし、彼は刑罰として鞭打たれたり、日々の糧の一部を否定される。...

指針3、...彼らの天国への道を教え、彼らの魂のためにすべてのことを行いなさい。」 *CD*, pp.462-463.

(28) 当時の農業経営と土地保有に関する標準的な理解として、Clay, C.G.A. *Economic Expansion and Social Change* (Cambridge, 1984), chap.3.

(29) *CD*, p.849.

(30) *CD*, p.849.

(31) *HA*, pp.27,28.

(32) *HA*, p.28.

(33) *HA*, p.28.

(34) *CD*, p.850.

(35) *HA*, pp.21,22.

(36) P.J. Bowden, 'Agricultural prices, farm profits, and rents', in J. Thirsk, ed., *The Agricultural History of England and Wales*, Vol.V. 1500-1640 (Cambridge, 1967), pp. 657f.

(37) *HA*, p.22.

(38) *HA*, pp.22, 23.

(39) *HA*, p.25.

(40) *HA*, p.25.

(41) *HA*, p.26.

(42) *HA*, p.26.

(43) *HA*, p.27.

(44) *HA*, p.27.

(45) *CD*, p.849.

(46) *HA*, p.38.

(47) *HA*, pp.38, 39.

(48) *HA*, pp.29,30.

(49) *HA*, p.31.

(50) *HA*, p.35.

(51) *HA*, p.36.

(52) *HA*, pp.36, 37.

(53) *HA*, pp.41, 42.

(54) *HA*, p.42.

(55) *HA*, p.41, 42.

(56) Lamont, *Op.Cit.*, p.119.